“げろりん”の家を作ろう　～A児の変容～
茨木市立北辰幼稚園（大阪府茨木市）　【5 歳児】

カエルと出会う

＜５月中旬＞

①散歩でカエルを捕まえ、A児は「水に入れないと、からからになるねん」と溝の水で湿らせながら園に持ち帰る。
②親しみをもって“げろりん”と名付け、溜めた水の中で泳がせる姿がある。
③「もう逃がしてあげたら？」「餌を食べないと死んでしまうで」と言う友達がいるが、A児は「ハエあげたし」と逃がそうとしない。

家を作る

＜５月下旬＞

④保育者とのかかわりから、A児はカエルが心配だが、「逃がしたくない」という思いをはっきり表し伝える。
⑤A児の思いを受け止めた保育者がA児に『“げろりん”の池を作ってみる？」と投げかけると、A児は喜び、池作りを始める。他児も仲間になり穴を掘って水を入れるが、すぐに水はなくなってしまう。図鑑を取り出し、再び池作りに挑戦するが、上手くいかない。石を敷き詰めて作ることを思いつき水が溜まって喜ぶが、遊ばせるとカエルが逃げてしまうことが分かって「屋根がいる」と気付いたり、翌日には水が抜けていたりして、停滞してしまう。

逃がす

⑥友達から世話ができていないと非難され、他のカエルが畑で元気に遊ぶのを見て、仕方なく“げろりん”を畑に逃がす。

げろりんの友達がいっぱいになる

＜６月上旬＞

⑦ジャガイモ畑に行った帰り道、子どもの目の高さの田んぼにオタマジャクシが大量に泳いでいるのを見つけて「うわ～」「“げろりん”の友達になる」「このオタマジャクシ、足が生えてる」「大きいで～」などと口々に思いを言い、オタマジャクシとのかかわりを楽しむ。
⑧「オタマジャクシ捕りたい。だって、“げろりん”の友達になるし」「“げろりん”になるもんね」と言いながら５歳児中心に何匹も捕まえる。
⑨『“げろりん”の友達がいっぱいになるな」「池ができたら、オタマジャクシも喜ぶかな」「池ができたら“げろりん”も帰ってくる」「オタマジャクシも広い方がいい」と言い、B児C児が池作りをする。水が無くならないように、以前に作った穴の底の石を取り除いてタライを入れ、隙間を土で固める。タライの中にも土を入れ、「ほんで、石並べるねん」と、石探しをして並べる。
⑩B児は祖父にもらった大事な白い石を家から持ってきて「オタマジャクシがカエルになっても、石に跳ぶやろ」と言い、池の中に入れた。オタマジャクシの池ができ、少し離れていたA児はもちろん、４歳児にもオタマジャクシへの興味が広がった。

＜６月下旬＞

げろりん、また帰って来るわ

- 学校のプールでカエルを見つけ『“げろりん”や」と捕まえ、園に持ち帰る。
- 園のビニールプールに入れて泳がせようと言う友達に、A児は「なんでよ。餌が無いからかわいそうやろ」と言い、池に行こうとする。
- 「泳がせてから池に入れたらいいやん」と友達に言われて納得し、A児はカエルをプールで泳がせてから、池に連れて行く。
- 少しして池に行ってみるとカエルがいないので、保育者が『“げろりん”どうしたの？」と聞くと、「池で気持ちよさそうに泳いだわ。それで、ぴょんと跳んでいった」と言う。
- 保育者が「池の外へ？」とさらに聞くと、A児は「うん。多分、餌を探しに行ったんやわ。“げろりん”また帰って来るわ」と言う。

＜考察＞カエルを捕まえて一緒に遊ぶことを楽しんでいたA児が、以前のように自分の手の中だけに入れようとはしなかった。餌を自分で探せるようにしてあげようという気持ちになっている。カエルと遊んで親しむだけでなく、カエルの気持ちになって発言するようないたわりや愛着へと変容したのは、生き物とたくさんかかわる機会をもつ中で、生き物と自分を重ねたり気持ちを感じたりするようになってきたからではないか。

みどころ

A児はカエルへの関心が高く、自分の「飼いたい」という思いを実現しようと行動しています。一生懸命池を作って「自分には飼育できる」と思い、やってみても失敗してしまいました。しかし、カエルの気持ちや生活を思ったり友達の言葉や行動を受け止めたりすることで多くを学び、「カエルは自分たちの作った池に戻ってくる」という考えを表すような変容につながる成長をしました。自信をもって表しているこの言葉から、A児自身が自分の成長やカエルへの思いを自覚することにつながったと思われます。

Copyright 2003-2008 Sony Foundation for Education.